

サイエンス・ワールド!!

2012, 11, 12(月)
第44号

那覇市立教育研究所
理科通信



問題解決の授業をめざして ～学習課題の作り方～

問題解決を取り入れた授業を進めるために大切なことは、児童生徒が対象をよく観て、「おやっ」と感じ、「なぜだろう」「どうなっているのだろう」と自ら「問い」を生む手立てを工夫しなければなりません。例えば、小学校3年生の「こん虫を調べよう」の単元の指導で、板書に「こん虫のからだを調べよう」という学習目標だけが提示されている授業を見かけます。「調べよう」と提示され、「じゃあ、予想してみよう」と言われても、児童生徒にとって予想することは難しいのです。「調べよう」という発問に対する答えは「調べました」なのです。



この場合は「こん虫のからだはどうなっているのだろうか」と発問し、「どうなっているか予想してみよう」「あしの数はいくつ?」「はねはどうだろうか?」と、より具体的な視点に落とししていくことが重要です。「児童生徒が実験・観察で検証し、考察できる問題になっているか」ということを吟味して、学習課題を設定しましょう。加えて、児童生徒とのやりとりを通して生み出された課題であるならば、より「自分ごとの課題」としての意識につながり、解決のために既習事項や体験を総動員して、予想や実験の見通しを立てることへつながります。(全ての単元にあてはまらない(知識伝達場面など)こともあります)。

こん虫のからだを調べよう

- こん虫はあしが何本あるのかな?
- あしはどこについているのかな?
- どのこん虫にもはねがあるのかな?

これでは、児童生徒は
予想が書けない

児童生徒が、実験・観
察で検証可能な課題
を設定する。考察を含
むものがあるとなおよい

学習課題に対して、児童が「〇〇だと思う」という発言が「予想」になります。さらに「〇〇ならば、△△になるだろう」と発言すれば、「仮説」となります。児童生徒が立てた予想や仮説を、観察・実験で検証し、考察をしていくのが問題解決の授業となります。
(文責：玉村かおり)